

岐阜大学医学部・同附属病院の整備について

医学の周辺科学と技術の著しい進歩に伴い、医療と医学研究が長足の進歩をとげつつある。これに対応するために、大学として医学教育・研究の構造組織と関係する環境設備を一層拡充し、附属病院にあっては先端医療にも対応できる設備を整備し、将来の医学・医療の進歩とそれに伴う社会的要請に応じることが必要である。さらに、高齢化社会の到来や国民の生活様式の変化に伴う疾病構造の変化、日本の国際化に伴う新しい疾患の登場など、医学教育・研究の両面における質的・量的な変化は著しいものがあり、この傾向は21世紀へ向けて今後とも一層進むものと考えられる。

これに対応すべく、広範な、しかも高度な医学知識・技術を精選して学生に修得させることも必須ではあるが、多様化する社会的要請に応え得る人間性豊かで倫理感に富む良き医師・医学者の育成が医学教育・研究に必要と思料される。

また、附属病院は、医学部の附属教育研究施設として、診療を通じての学生の臨床教育及び卒業後医師の臨床研修並びに医師の生涯教育の役割を担うとともに、先進医療についての研究・開発を行い、医学水準の向上に貢献すると共に、地域の中核的医療機関として地域住民の健康維持・増進に寄与する責務がある。

このような役割を担う医学部・同附属病院が21世紀に向けての医学教育・研究及び医療の進展に寄与し、新たな社会的要請に十分にこたえていくためには、教育・研究・診療体制を抜本的に整備していく必要がある。

医学部・同附属病院は、昭和39年及び同42年に国立移管され、現在まで敷地(30,900 m²)の関係等により、必要最小限の整備を行ってきたが、建ぺい率44%、容積率226%(建物述べ面積約69,700 m²)と有効な空地がほとんどない状況にある。

医学部は建物の老朽化(全体の79%が危険建物)による雨漏り、モルタル落下、漏水等種々の問題が発生している。また、共通機器室等の増設に伴い、研究室の面積が縮小され、セミナー室及び実習室も転用されており、教育・研究に支障を来している。さらに、平成7年度の入学生から導入したテュートリアル教育に必須である小教室を20室設置したが、なおも10室が必要とされ、十分な教育資材と共にその整備が緊急に求められている。

一方、共通実験施設においては、RI施設及び遺伝子実験施設のいずれも極めて不完全又は殆ど未整備とも言える状況にあり、研究及び実験に極めて大きな支障をもたらしている。

動物実験施設は、平成 8 年に省令施設として認められたが、現代医学で求められる実験水準を満たす施設ではなく、全面的な整備が求められている。

また、附属病院は建物全体面積（約 49,200 m²）が少なく、各診療科、中央及び特殊診療施設等の各部門が狭く有機的な配置ができていないために、先端的医療設備が導入できないことと、増築の積み重ねでカルテ等の搬送設備が設置できないこと、駐車場が狭すぎて外来患者に多大な不便を強いていること等、医療の向上及び効率化並びに患者サービスの面で苦慮しているところである。さらに、平成 8 年度から総合診療部を新設したが、それが十分機能していくためには、関連する施設の整備は必要欠くべからざるものである。

このような状況のなかで、医学・医療に対する当面の社会的要請にこたえていくにも、現在の附属病院施設は職員の懸命の努力にもかかわらず限界にきており、医学部は、岐阜大学柳戸地区に隣接した地に移転を目指しているが、移転後の、医学部・同附属病院が 21 世紀の医療を担うにふさわしい理想的な施設になるよう鋭意努力する必要がある。